R2.12/25 埼玉新聞

高齢者の生きがい向上

幼老施設複合化 隣接園児と交流会

県内で介護福祉施設や幼児施設を運営する社会福祉法人「光彩会」(野沢孝道理事長)は、施設に入居する高齢者と、同じ敷地内に隣接する保育園の園児たちとの交流会を毎週行っている。幼老施設の複合化による多世代交流で、高齢者の生きがい向上と子どもの教育的効果の促進を図っている。

同法人運営の特別養護老人ホーム「みちみち大宮」(さいたま市北区)では毎週金曜日の午前中、隣接する「大宮みちのこ保育園」(同)から園児たちが交流にやってくる。園児たちは新型コロナウイルス感染症対策として屋外から踊りや歌などを披露。高齢者は施設内からガラス戸越しに手をたたいたり動きを合わせたりしながら楽しそうな様子を見せた。

動きを合わせながら園児たちの踊りを見つめる入居者たち=さいたま市北区の「みちみち大宮」

石井幸子常務理事は「子どもは高齢者のエネルギーの源。入居者の生きがいが増している」と効果を実感する。

同法人は県内に介護福祉施設4事業所と保育園3事業所を運営するが、保育園運営を始めた2013年から「幼老共生」を掲げ、幼老交流の取り組みを開始。「無表情の認知症の高齢者に喜怒哀楽の表情が生まれ、車いすから立ち上がる高齢者もいる」と目に見える変化があった。

核家族化で祖父母に会う機会の少ない子供たちにとっても、高齢者に触れ合うことで思いやりやいたわりの心を育むなどの相乗効果もある。

今年は大学との共同研究が行われる予定だったが、コロナ禍の影響で延期。「幼老交流の効果を可視化した上で、介護施設を拠点として複合的な街づくりへと発展させていきたい」と話している。

(山田浩美)